

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：80101

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K15199

研究課題名（和文）明治期北海道移住者による農家建築の成立・変容にみる母村文化の影響に関する研究

研究課題名（英文）Research on the Influence of Mother Village Culture in the Formation and Transformation of Farmhouse Architecture by Meiji-Era Settlers in Hokkaido

研究代表者

鈴木 明世（Suzuki, Akiyo）

北海道博物館・研究部・研究職員

研究者番号：30823942

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、明治期の北海道への移住者が郷里（母村）の文化を住宅建築にどのように取り入れてきたかを明らかにすることを目的とした。野外博物館北海道開拓の村に移築復原された農家住宅建築を対象にして、移築復原時の資料を整理するデータベースを構築し、郷里と移住先での建造物の形態を比較分析した。その結果、構造的な類似性だけでなく、郷里の生活文化や産業の影響のもとで建設され、北海道の気候や資材に適應する形で変容した過程が明らかになった。さらに、郷里と移住先が密接に関係して建設された事例も確認され、移住者の文化的背景が住宅建築に及ぼした具体的な影響を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、本州以南において数百年を超えて連綿と受け継がれてきた文化を持つ地域から移住し、北海道という新天地で暮らし始めた人びとが、どのような生活文化を紡いでいくか、その継承と適應の過程を「建築」を通して明らかにすることであり、地域の歴史やそこでの文化遺産の価値を再評価する契機となることにつながっていくものと考えている。特に、開拓の村の建造物を通じて、移住者たちの生活様式や建築技術が、どのような変遷過程を辿ったかを示すことにより、北海道民にとっての郷土史の再考機会の提供や、北海道外からの観光客に対する教育的効果にもつながっていくことを目指した。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify how Meiji-era settlers incorporated their mother village culture into the construction of their houses in Hokkaido. By focusing on the farmhouses relocated and reconstructed at the Historical Village of Hokkaido, I created a database to organize materials from the relocation and reconstruction period. Through comparative analyses of building forms in both the mother village and the new settlement, the results revealed not only structural similarities but also how these buildings were influenced by the mother village's lifestyle and industries. Additionally, I confirmed cases where the mother village and the new settlement were closely related during the construction process, shedding light on the specific impacts of settlers' cultural backgrounds on housing architecture.

研究分野：建築史

キーワード：民家 生活文化 北海道開拓 構法 建築資料 アーカイブズ

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) 北海道建築史から見る本研究のテーマ

北海道において、「開拓」のための本格的な移住が始まったのは、明治2（1869）年に開拓使が設置されてからのことである。屯田兵や農業移民など、他府県からの移住者による土地の開墾・開発によって、今日における市街地の展開の礎が築かれた。しかし、寒冷積雪という特殊な環境条件の中では、本州以南と同様の生活様式で暮らしていくことはできず、類似した環境の中で発展してきたアメリカの技術を導入することなどで、北海道らしい住生活文化へと変化させてきた。例えば、開拓使の官舎においては、純洋風住宅を取り入れたところ、日本的な生活様式とは合わなかったため、下見板張りや上げ下げのガラス窓、ストーブなどの洋風の仕様を取り入れつつも、内部は和風にする北海道的和洋折衷の発明に至った。そして、大正期頃からこの仕様の庶民住宅が市街地を中心に流行していくこととなる。また、北海道内各所に集団で移住してきた人びとは、郷里の建築様式で建てた住宅に、環境適応のための技術（主に下見板張り、ガラス窓、ストーブなど）を掛け合わせた北海道スタイルの住宅をつくりあげたのである。これらの技術発展の一連の流れは、遠藤明久『北海道住宅史話 上・下』（住まいの図書館出版局, 1994）で語られている。

とりわけ移住後の住宅史においては、足達富士夫・住谷浩・野口孝博『北海道農村住宅変貌史の研究』（北海道大学図書刊行会, 1995年）に詳しく、同一住居の複数時点での調査等を通して、時代ごとの変遷について論じている。本研究では北海道建築史の中でも、特にこのような、明治期の移住者らによる住宅建築がいかに郷里（母村）との関連の中に成立し、その後どのような変遷を辿ったか検証することが大きなテーマとなっている。

(2) 野外博物館資料の研究活用に向けた対象設定

申請者の勤務先で管理している「野外博物館 北海道開拓の村」（以下、開拓の村）では、明治から大正期に北海道内で建設された52棟の建造物を移築復原（一部建造物は再現）し、昭和58（1983）年の開村から現在まで生活・産業・文化を語る建築史料として保存・展示してきた。これらの建造物には、上記のような、移住者たちが北海道での暮らしのなかで、本州以南の様式をもとに、各地域の環境に合わせて変化させてきた過程が現れている。

開拓の村への移築復原の際には、それぞれの建造物は、創建当初の姿に戻されることが基本とされた。現在においても、過去の記録として現地での解体工事に至る調査を経て作成された「現況図」や、痕跡調査やその他の史資料を基にして作成された創建当初の「復原図」などの資料が残されており、「創建時」とそこから生活に合わせて増改築された「解体時」の建築の姿を、復原図（及び復原建造物）と現況図として確認することができる。つまり、これらの資料の比較分析によって、環境適応や時代の経過による変化の過程を辿ることが可能になっているのである。また、建物に関する沿革などの基礎情報も既にまとめられている。これらの情報は、野外博物館資料が持つ研究活用の可能性の一つであると言える一方で、移築復原時の詳細な調査ののち、保存改修工事等の維持管理での利用の域を超えて活用されたり、新たな情報が蓄積されたりすることは多くなかった。

そこで、本研究の主要な対象は、開拓の村建造物に設定して進めていくこととした。

2. 研究の目的

移住者たちの郷里（母村）と移住先での関係において顕著な例としては、地名や、年中行事、前述の建築様式の受け継ぎなどが見られる。本研究では、特に住宅建築に着目して、開拓の村に現存する建造物を用い、移住先での住宅形式や生活スタイル、郷里の住宅様式等を比較分析することで、明治期北海道における住宅建築の変容過程に潜在する、郷里の文化の影響を見いだすことが目的である。その際、野外博物館の移築復原時資料をいかに活用するか、という観点を意識して実施した。

3. 研究の方法

本研究は、大きく二つのベクトルで実施した。

(1) 開拓の村建造物に関するデータベース作成

開拓の村の建造物の資料の多くは、北海道博物館に収蔵されている。本研究のみならず、今後の研究活動に利活用することを想定し、開拓の村建造物に関する現況・復原図や現況写真、工事写真など様々な資料のデータベース化を行った。データベース化にあたっては、File Maker Proを用いた。

(2) 対象建造物の移住先及び母村に関する調査

① 移住先の住宅建築に関する調査

開拓の村に現存する移築復原建造物や（1）で整理した資料をもとに、文献・資料調査を行いながら移住先での住宅や生活文化及びそれらの歴史的変遷について分析を行う。

②母村の住宅建築に関する調査

母村に関して文献調査や現地調査等を行い、母村での住宅様式・生活文化及びそれらの歴史の変遷について分析を行う。

③移住先と母村の比較分析

①及び②の成果の比較分析を通して、移住先の住宅建築に見られる母村文化の影響について検証する。

4. 研究成果

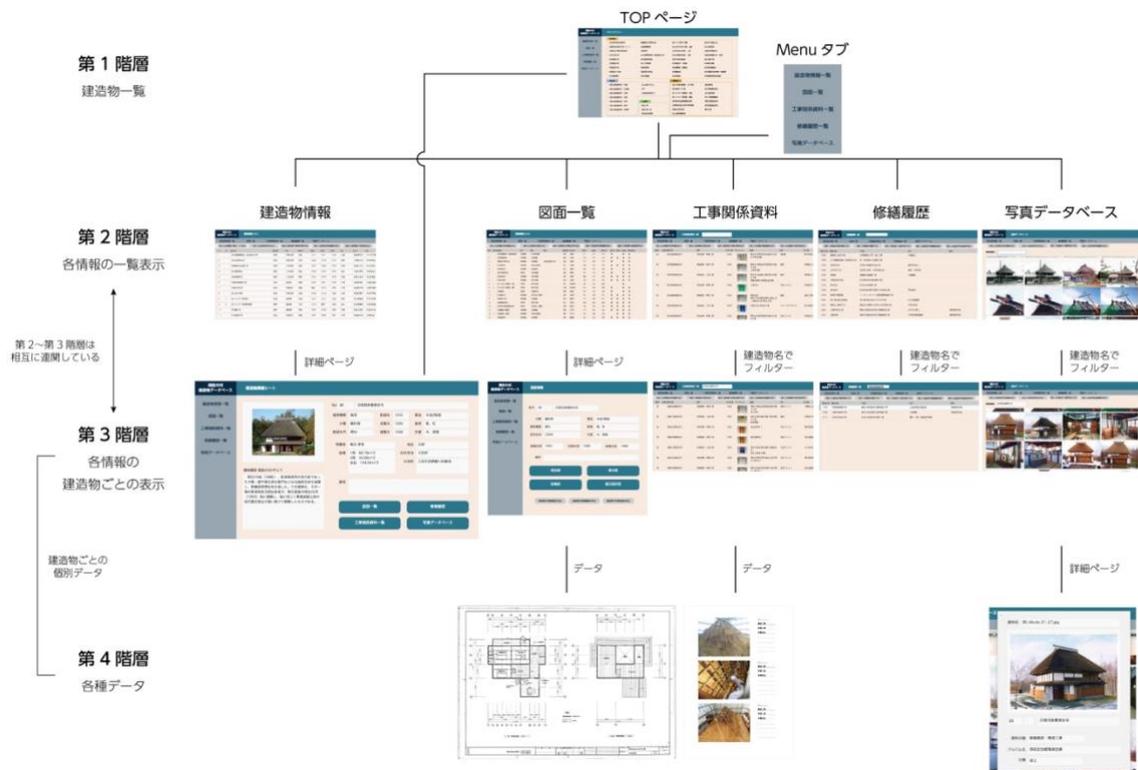
(1) 開拓の村建造物データベース

開拓の村建造物の移築復原時の資料としては、前述の「現況図」「復原図」や「設備図」「展示設計図」等の図面資料、工事アルバム等の工事関係資料、内部展示等に向けた調査資料など多岐に渡り、現在は北海道博物館に保管されている。そのほか、その後の修繕にかかる資料や、劣化度調査など維持管理の中で作成された資料などもある。その多くがデジタル化されておらず、資料全体の一覧性や容易な閲覧性に欠けてしまっているのが現状である。

そこで、それら資料のアーカイブをデジタル上で閲覧できるようなデータベースの構築に向け、本研究期間内では1棟を特に取り上げてプロトタイプを作成した。データベース化には、Claris FileMaker Proを用いた。

まずデータベースを構成するテーブルは、「建造物情報」「移築復原・再現時の図面」「工事関係資料」「修繕履歴」「写真データベース」の5つとした。ドップページを第1階層として、5つのテーブルごとに情報を見られる第2階層、個別の建造物でフィルターをかける第3階層、個別の資料を閲覧する第4階層と階層を分けレイアウトを作成した。「建造物情報」「移築復原・再現時の図面」「修繕履歴」は、全ての建造物について情報を入力し、「工事関係資料」「写真データベース」については、一部の建造物のみ整理している。

今後の作業としては、各種資料のデジタル化を行い建造物ごとにデータを追加していくこととなるが、本研究内容のような開拓の村建造物を用いた研究成果の蓄積なども、このデータベース上で行っていきたくと考えている。今後作業を進めながら、構成やレイアウトのアップデートを行いつつ、ゆくゆくは可能な範囲での一般公開を目指している。



本研究で作成した開拓の村建造物データベースの構成

(2) 対象建造物の移住先及び母村に関する調査

●郷里の生活・産業の継続と変遷 (旧菊田家農家住宅)

旧菊田家農家住宅は、現在の北海道江別市の野幌地域に移住した新潟県魚沼郡出身の桜井弥四郎によって明治26(1893)年頃建てられた住宅建築である。この建物は木造2階建て茅葺で、当初は2階で養蚕が営まれていた。旧所在地である野幌は、明治19年(1886)に大橋一蔵、関

矢孫左衛門らによって新潟県長岡町に設立された「北越殖民社」の集団移住によって開墾されていった地域であり、桜井もその一員として移住してきたのである。のちに、この建物を譲り受けた菊田家もその一員であり、新潟県蒲原郡の出身であった。

本研究において、菊田家農家住宅における、郷里である新潟県との関連について、調査の結果次のことが確認できた。

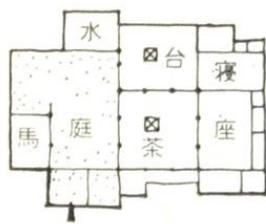
- ・平面形態では、新潟県教育委員会編『越後の民家〈上越編〉 新潟県民家緊急調査報告〈1〉』（1980）において「西頸城型B」に分類される間取りとほとんど同様の形態となっている。（魚沼郡における一般傾向とは異なる形式であるが、新潟県内各地から人を集めたことを考えると、必ずしも創建者個人の母村の形式が反映されるとは限らないと言える）
- ・構造的な面においては、新潟県の茅葺き屋根にも多く見られる特徴的なセガイ造りが、旧菊田家農家住宅においても用いられている。なお、『越後の民家〈上越編〉』において、西頸城型に類型される建築では、チョウナ梁が用いられる傾向が見られるが、菊田家農家住宅には用いられていない。むしろ屋根においては魚沼型に近い構造と言える。
- ・関谷マリ子『野幌部落史』（国書刊行会、1974）において養蚕業の経験を活かして「移住後数年新潟県魚沼郡の出身者に依って試みられた」（p. 146）との記載があり、郷里での養蚕業が移住先でも実施されていた。しかし、販売の条件等が合わず、すぐに衰退したようである。建築空間としては、総二階とまでは言えないが、屋根裏よりは当初から空間として構成させたような形式となっている。

また、移築直前の解体時における大きな変化としては、次のとおり。

- ・2階において、吹き抜けに床を張ることで空間を拡張し、間仕切りや押し入れ、窓を増設して、居室に転用している。また、土間には床が貼られ、居室化している。
- ・外壁において、土壁漆喰塗りから下見板張りになっている。このほかストーブ等も設置されている。
- ・玄関に中門のような空間が増設されている。

これらの変化から旧菊田家農家住宅の建築的特徴をまとめる。

まず、郷里と類似した間取りや屋根構造が用いられており、郷里の影響を受けた建築生産が行われている。しかし、新潟県内の決まった地域の形式に捉われるのではなく、移住先で得られる資材等の影響か、複数の地域の形式を組み合わせたと考えられる。また、郷里で行われていた産業である養蚕業を移住先でも実施するために、それに適した空間を建築段階から設けていた。この空間は、養蚕衰退後には拡張され、居室として転用された。



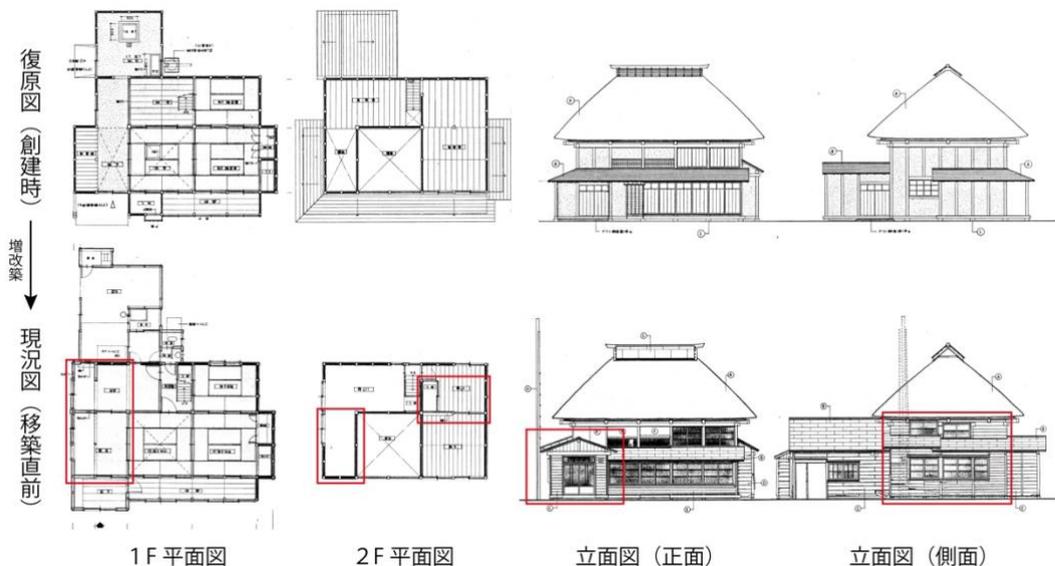
『越後の民家〈上越編〉』（p. 28）において「西頸城型B」に類型される間取り
建物規模は違うが、四つ間取りの構成や、土間の奥の水場などの基本構成に、旧菊田家農家住宅との類似が見られる。

建築以降、北海道の環境条件に適用させるかたちで、外壁を下見板張りに変え、玄関の空間を増設している（※）。それによって、ミニマムな中門造のようになり、むしろ雪国である新潟県の建築に近い形態になっていた。

このように、旧菊田家農家住宅においては、郷里の生活がもたらした空間構成と、産業を見据えた新たな空間の設置など、郷里の生活・産業の継承と変容が見られた。

なお、本成果については、研究代表者による基盤研究C「北海道への養蚕技術の流入と養蚕建築の変容過程」（課題番号：23K04227）につなげて継続した調査を実施するため、詳しくは別途報告する。

（※）あくまで移築復原当時の調査によって、創建時の姿として設定されたものであるので、創建当初からこうした玄関であった可能性も考慮する必要がある。



旧菊田家農家住宅の復原図(上)と現況図(下)における変容過程（本文に記載した主な変更点を赤枠で示した）

●生活に密接した建築構成の継承（旧岩間家農家住宅）

岩間家は旧仙台藩亶理領（宮城県亶理町）の士族移民団の一員として、明治4年（1871）に現在の北海道伊達市に移住した。この建物は明治15年（1882）に郷里の大工によって建築されたことが既に判明している。建物の構造は、木造平屋建て石置き板葺屋根である。

亶理町や伊達市への現地調査によって新たに次のことを確認した。

- ・旧岩間家農家住宅で特徴的なつくりである外壁側での柱と柱をつなぐように通る横棧について、亶理でも同様の柱の切り欠きを確認した。
- ・一方で、その棧は柱と柱をつなぐように設置されたものではなく、柱両端から左右50mmほどの長さにとどまっていた。また、岩間家農家住宅の復原では、真壁になっていたが、亶理町では土壁の大壁であったものが多かった。また、伊達市にある三戸部家住宅においても、大壁となっており、伊達市教育委員会所有の改修工事記録を閲覧したところ、亶理町と同様の柱の切り欠きと棧が見られた。
- ・内部の板間に存在するつくり付けの戸棚が、亶理町でも同様の形式のものが見られた。

このように、詳細な工法にも郷里と類似したつくりが見られたほか、生活様式に影響するつくり付けの家具なども郷里との関係を見てとれた。旧岩間家農家住宅は、郷里の大工によって建てられたと記録が残されているが、具体的に「郷里の建築様式」として考えられる痕跡を今回の調査で明らかにした。



旧岩間家農家住宅（上）と亶理町の民家（下）の比較

亶理町で確認した土壁の大壁では、横棧は柱から50mm程度しか出していない。

●郷里との密接な関係による建設活動（旧青山家漁家住宅）

関連調査として、旧青山家漁家住宅の郷里の調査も行った。

青山家は、安政6年（1859）山形県から北海道に渡り、小樽沿岸を中心に鯨建網などを経営した漁家である。開拓の村に移築復原されている母屋は、小樽での2代目の母屋であり大正8（1919）年に建てられた。いわゆるニシン番屋と呼ばれる、ニシン漁経営者の住居と漁夫が寝泊まりする空間とが共存している建築である。

本研究においては、山形県遊佐町に現存する青山本邸と小樽の青山家との関係について調査を行った。遊佐町教育委員会の協力を得て、青山本邸に残されている書簡や電報の記録や、当主の日記帳を確認し、また北海道博物館に所蔵されている同様の資料の確認を経て、北海道の母屋の建設時期や資材・職人の斡旋等について、遊佐と小樽の青山家で密接な関係を持ちながら建設にあたっていた経緯を確認した。

初代の母屋は火災によって消失したが、現在残されている2代目の母屋が竣工するまでわずか半年程度で建設されていることが判明した。その迅速な対応の背景には、郷里との密接なやりとりにより本州から材料や職人を得られたこと、同時期に建設予定であった別邸建設のための資材が既にあったことなどが上記資料から確認できた。

本研究の大きなテーマとしては、本州以南における数百年を超えて地域で連綿と受け継がれてきた文化を持つ地域から移住し、北海道という新天地で暮らし始めた人びとが、どのような生活文化を紡いでいくか、その継承と適応の過程を「建築」を通して明らかにすることであり、地域の歴史やそこでの文化遺産の価値を再評価する契機となることを目指した。特に、開拓の村の建造物を通じて、移住者たちの生活様式や建築技術が、どのような変遷過程を辿ったかを示すことにより、北海道民にとっての郷土史の再考の機会の提供や、北海道外からの観光客に対する教育的効果にもつながっていくものと考えている。とりわけ、本研究期間においては、郷里の生活文化・産業の影響の反映、細かい工法まで郷里の技術が用いられていること、郷里との密接な連携における建設活動等について、新たな知見が得られるものであった。引き続き、様々な角度から郷里（母村）と移住先との関連について調査を進めていく。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 山際秀紀, 池田貴夫, 会田理人, 青柳かつら, 尾曲香織, 舟山直治, 鈴木明世	4. 巻 9
2. 論文標題 「北海道における戦中・戦後のくらしの変化に関する聞き書き調査」中間報告	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 北海道博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 93-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 尾曲香織, 圓谷昂史, 表深太, 亀丸由紀子, 鈴木明世, 鈴木あすみ	4. 巻 9
2. 論文標題 「北海道の離島における自然・歴史・文化に関する研究」実施報告	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 北海道博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 107-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木明世	4. 巻 32
2. 論文標題 養蚕業の建築からみる本州以南とのつながりと北海道らしさ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 森のちやれんがニュース	6. 最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 舟山直治, 尾曲香織, 鈴木明世, 高橋佳久	4. 巻 8
2. 論文標題 女夫龍神の祭祀 家族による信仰の伝承と祭祀に関わる社殿の現況調査について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 北海道博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 79-104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 尾曲香織, 圓谷昂史, 表溪太, 亀丸由紀子, 鈴木明世, 鈴木あすみ	4. 巻 7
2. 論文標題 「北海道の離島における自然・歴史・文化に関する研究」中間報告	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 北海道博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 83-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木明世	4. 巻 6
2. 論文標題 開拓の村建造物関係資料データベース化に向けた作業報告	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北海道博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 155-160
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木明世	4. 巻 6
2. 論文標題 沙流郡平取町二風谷に現存する明治40年建築のアイヌ家屋について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 131-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木明世	4. 巻 70(2)
2. 論文標題 住宅における和と洋の融合 - 旧開拓使爾志通(にしどおり)洋造家(白官舎)を事例に - 「北海道開拓の村」にみる木造建築 その2	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ウッディエイジ	6. 最初と最後の頁 8-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木明世	4. 巻 69(8)
2. 論文標題 開拓使による洋風建築 - 旧開拓使工業局庁舎を事例に - 「北海道開拓の村」にみる木造建築 その1	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ウッドイエージ	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 鈴木明世
2. 発表標題 北海道における養蚕業とそれにまつわる建物のかたち
3. 学会等名 北海道博物館ミュージアムカレッジ
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 武田明純, 小野寺一彦, 金子晋也, 駒木定正, 鈴木明世, 西澤岳夫
2. 発表標題 三笠市炭鉱遺構群の調査研究 旧北炭幌内炭鉱の選炭機の現況と復元的考察
3. 学会等名 日本建築学会北海道支部研究発表会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 鈴木明世
2. 発表標題 「野外博物館 北海道開拓の村」に保存・展示される建造物の図面整理状況についての現状報告
3. 学会等名 日本建築学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 北海道博物館編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 北海道博物館	5. 総ページ数 104
3. 書名 北海道開拓の村建造物紹介 北海道のニシン漁と青山家 旧青山家漁家住宅の魅力	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------